

中世の歌人 I

日本歌人講座



文学博士久松潜一
文学博士實方清 編

日本歌人講座 第三卷

中世の歌人 I

弘文堂

歌座 中世の歌人 I
日本講座 日人

中世の歌人 I

昭和四三年九月三〇日 初版発行

定価一五〇〇円

編者 久松 潜 清一

発行人 鯉 渕 年 祐

印刷所 あづま堂印刷株式会社

製本所 株式会社若林製本工場

発行所 株式会社 弘文堂新社

編集 東京都千代田区神田駿河台四一四
電話(二五)七一八六九

営業 東京都文京区関口一丁目一四一八
電話(二六)〇〇四二〇一

振替 郵便番号 一一二
東京 五三九〇九番

序

日本の抒情文芸の中心は和歌であり、和歌の中心は短歌である。抒情文芸の本質は抒情性と言う文芸性の中に認識される。この短歌は記紀の和歌から現代短歌に至るまで二千年に及ぶ美的伝統の中に生成発展してきた。この発展の相を文芸史的に見ると四つの大きい美的世界において認められる。それは万葉の世界と古今の世界と新古今の世界と近代短歌の世界とである。これを時代的に見ると上古と中古と中世と近代とである。近世は抒情文芸史の上では一つの谷間であった。和歌はこの四つの世界の中でその本質的世界を美しく表現して来た。この和歌史的展開をその美的内容の上からみると、純一と壮大な世界から典雅と連想の世界へ、そして幽玄と優艶なる世界へと展開し、近世と言う谷間を通して近代に至り浪漫と写生の上に近代短歌の絢爛たる美的世界を見ることが出来る。万葉の世界が成立するためには記紀の和歌と言う源流の世界があり万葉はここから発展成立し、感動と観照との中で壮大純一なる抒情の世界を創造したのである。柿本人麿と山部赤人とはその二つの世界を代表する歌人であった。この万葉の世界によって上古の和歌が形成されたのである。古今の世界は俊成や定家が庶幾した世界でもあって、典雅と連想の中に中古の和歌の世界を形成し、紀貫之・曾禰好忠・和泉式部・源俊賴等の代表歌人を出している。次いで新古今を中心とする中世和歌は上限に千載集があり、下限に玉葉集や草根集によって和歌史上最も光輝を放った中世の和歌の世界を形成し、俊成・西行・定家・爲兼・正徹などの代表的歌人を輩出している。ある意味ではこの中世の和歌によって和歌の本質的世界が形成されたとも言える。近世の和歌に至ると古典歌集を庶幾する意識する中に、万葉主義の和歌と古今主義の和歌と新古今主義の和歌とが真淵と景樹と

宣長とを代表として形成されたのである。これに加えて現実主義の和歌が万葉主義との関係の中で形成され良寛や言道によって代表された。この近世の和歌は上古の和歌や中世の和歌のように本質的特色を持つものではなく古典歌集の中にその生命を見出そうとしたものである。それが近代になると短歌の世界は見事に開花し、浪漫派の短歌が先ず現われ、次いで現実派短歌と写生派短歌は多くの代表的歌人を輩出し、近代短歌はその極致を示現した。晶子によって浪漫派短歌が極致に達した後に現実派と写生派の中に左千夫・節・赤彦・啄木などが現われ近代短歌は充実と絢爛を競うたのである。そして近代短歌より現代短歌へと多くの歌人を輩出しながら推移して行った。

この和歌の発展の中で和歌史を形造った代表的歌人六十二人を選んでこれを八巻に編成しここに「日本歌人講座」を編集した。本講座は歌人の単なる評論ではない。専門の学者によって精細に研究された歌人論であり、歌人の抒情性の究明であり、その美的世界の認識である。従って現在の学界における歌人研究の最高水準を示すものである。本講座は世上にある雑多な事項や多くの歌人について雑纂的に編集されたのではなく、和歌史の体系を考え上古から近代現代に至る迄の和歌の本質的世界を明らかにし得るように代表的歌人を体系的に整序し、多年に亘って研究を深めた専門の学者によって精細をつくして研究されたものである。幸に和歌研究の専門学者の全面的協力を得てこの「日本歌人講座」全八巻を刊行し得ることは学界のため誠に喜ばしいことである。本講座に對して広く文芸を愛し和歌に関心を持たれる多くの人々の積極的な協力を願う次第である。

昭和四十三年九月一日

責任編集者

久松潜一
實方清

目次

中世の和歌(一)	實方	清	一
藤原俊成	實方	清	三
西行法師	窪田章一郎	壺	
後鳥羽院	樋口芳麻呂	二	四
藤原定家	久松潜一	三	五
藤原家隆	山崎敏夫	三	五
寂蓮	斎藤清衛	三	五
源実朝	上田英夫	三	五

中世の和歌(一)

一

和歌史上の中世については色々な概念設定が考えられる。和歌史における中世を政治史における中世と同一視して俊成や西行さらには定家までを中古の歌人としている考え方も存在する。政治史の上からみれば中世は建久三年から始まり慶長八年までの約四百年間を称するのである。即ち源平二氏の争乱の結果、平氏が亡びて源氏によって鎌倉幕府が創立された年から徳川家康が江戸幕府を開くまでの四百年間が政治史上の中世である。中世和歌史はこの中世史と全く符合するものであるか。文芸史と政治史とはつねに同一であり、またあらねばならないかと言う問題は、文芸史の本質概念に立って考えるならば文芸史は必ずしも政治史に一致せしめる必要はないと言うことになるであろう。しかしまた文芸史であるから一般歴史の概念からあまりにもかけはなれて了うことは許されない筈である。ここに文芸史の概念を正確に把握する必要があるであろう。この中世と言う四百年の時期は、公家は京都に武家は関東に相対立して文化の中心が二分されており、少くとも足利氏による室町幕府までは、その対立は無意味なものであった。公家は平安の昔を憧れ返らぬ夢を慕い新しい文化創造に意欲がなく、武家は新しい文化創造には力が足らずに推移した時代である。政治史の上から中世と言うものを見ると争乱が相次いで起り不安と混乱の中にあったが、しかし平和な時代もあり東山文化の如きすぐれた文化の時代を創造してい

る。中古が感性的主情主義の中にあったのに対し中世は全体が宗教的であり無常思想の基調の中にあったようである。平氏の滅亡と言うことが人心に与えた影響はまことに大きいものがあつた。盛者必衰の理の中に無常觀が時代思潮の基盤になつてゐるようである。文芸史における中世と言うことは中世文芸史を規定する上に十分に考慮すべきことである。歴史と社会とはそのまま文芸史の内質を形成するのではない。そこでは歴史と社会とは文芸史の内質形成に深い関係のあることを認識しておけばよい。広く中世文芸史を考える場合文芸における中世的なるものの限界をどう考えるかと言うことが大きい問題である。しかしそれも中世史や中世社会を十分考察することは大切であるが、それを究明しても文芸における中世的なるものを規定する最後の決め手にはならない。ここではつねに文芸そのものが主体的に問われなければならない。中世と言う歴史は考え方によっては混乱と暗黒の時代とも言われる。しかしこれは単なる暗黒ではなくその中に文化の意味があつた。真に平和な時代と言われるのは東山時代位であろうし、その外はつねに不安と動搖の時代で、この中に無常思想は人々の生活の中に浸透し新仏教が精神を支配した時代であつたようである。この不安と無常とは文芸の世界に強く影響したことは否定出来ないであろう。このような中世の歴史と社会との背景的認識の中にあつて中世和歌の本質的世界が考えられなければならない。そこに和歌の中世的形象が明らかに見られるのである。

中世の和歌は日本の抒情文芸史の中で最も豊かな抒情性の世界を形成している。万葉集において確立した和歌の世界は中古の和歌を通して中世の和歌に至つてまことに絢爛たる抒情の世界を形成したのである。時代全体が不安と混乱と無常の連続であつたに拘わらず和歌の世界においてはかつてない高く深い抒情文芸の世界が形成されたことは特記すべきことであつた。この中世和歌と言う世界は万葉集以来日本の抒情の最も高い部分を形成しているものであり、短歌完成の姿を見ることも出来る。万葉集において確立した和歌の世界は八代集の展開の中に

その完成を遂げたものである。八代集の中の千載集は中世和歌の冒頭を飾るものとして考えると、中世和歌の世界は、千載集の藤原俊成や西行から藤原定家などの新古今歌人を経て玉葉集の京極為兼に及び草根集の正徹に終る世界を言うことができるのである。ここに和歌における中世的なるものの限界規定が極めて重要なものである。中世の和歌は勅撰集と深い関係を以て見ることも出来る。勅撰集は古今集にはじまる三代集さらに八代集と新勅撰集にはじまる十三代集とで二十一代集の世界を考えることが出来るが、三代集を除いては実質的に中世和歌の世界に属するものと見ることも出来る。三代集は古今集の理想を表現し流麗典雅な世界にその本質が認められるが、三代集後の世界になると和歌の革新が考えられ古今の世界とは異なる曾禰好忠や和泉式部などが現われ、次の金葉集になると中世和歌的傾向が実質的に見られるのである。源俊賴の歌の如きは考え方によっては「あはれ」に幽玄なる世界を示現しているものとも言われる。例えば「鶉なく真野の入江の浜風に尾花波よる秋の夕ぐれ」の歌はあきらかに古今の世界ではなく、千載の世界を示現している歌であると言うことが出来るであろう。この意味で中古和歌の世界は古今集から後拾遺集までの四勅撰集の世界であり、八代集の第五集である金葉集から実質的に中世和歌の世界を現わしているものと言える。このように考えると中世和歌は二十一代集のうち十七代集の世界を含むものとなり、まことに深く広い和歌的世界を持っているのである。この勅撰集を中心として中世の和歌の世界を見ると、前期の和歌と後期の和歌とに分けることが出来るのであり、前期は千載集と新古今集とを中心とした世界であり、後期は風雅集と玉葉集とを中心とした世界であると考えることが出来るであろう。後期はこの二勅撰集の外に草根集という巨大なる和歌的世界がみられるのである。このようにみると本巻にて論及した歌人は前期に属する者であり、従ってこの総説も中世前期の和歌の世界に対するものとなる。このように中世和歌の世界はその本質と限界とを考えると可成複雑な問題を内包している。八代集の展開さらに十三代集の

展開ということを考えると中世和歌の高さと深さとがみられるのである。この意味でも中世和歌の本質的世界と言うものは歌人によって考えるならば、俊成・西行・定家・家隆・為兼・正徹の六人の和歌の世界の中に見られるであろう。政治史の区分によれば中世和歌は鎌倉幕府の成立後であるという考え方に立つのであるが、これは適當ではない。例えば児山信一著の「新講和歌史」は政治史の区分によって和歌史を考えているのである、俊成や西行などは中古和歌の中に入れてゐる。このようにここで根本的に考えねばならぬことは、文芸の歴史と一般の歴史の概念は必ずしも一致しないと言うことである。原則的には同じであるが特に中世文芸と近世文芸の場合には政治史の区分によってその文芸の歴史が明確に規定されないということはある。和歌の歴史を考える場合にも近世和歌と中世和歌との限界及び近世和歌と近世史の關係は必ずしも明確ではない。このように文芸史と政治史又は一般史との關係は文芸研究の一つの問題としてつねにあることで究明する必要がある。

文芸史がつねにそうであるように、和歌史もつねにその自律的主体性が考えられなければならない。中世和歌において最も大きい問題の一つは千載集を中古和歌に入れるか、中世和歌に入れるかと言う問題である。この千載集の考え方によって俊成と西行と言う二大歌人が中古和歌に入るかそれとも中世和歌に入るかと言うことが決定される。文芸の時代的区分と言うことはその文芸自体の内容によって規定すべきであるからある文芸作品が中古の末期にあったと言うことだけでそれを中古文芸と規定することは出来ない。従来の日本文学史においては大部分が平安時代の和歌として取扱つていたようである。千載集はたしかに中古末に成立している。政治上における鎌倉幕府の成立以前であることは明白である。その故を以て千載集は中古和歌の中に入れることが適當であると言う考え方は文芸史の主体性を認識しないものであつてこれは認めることが出来ない。最も重要なことは千載集の本質的内容の問題である。千載集の美的内容が中古的なものか中世的なるものかを考

えて規定すべきである。形式的に政治史の区分の中で文学作品を配列し編成して解説するという形式主義は、真の日本文芸史を考えようとする者には何んの意味もないことである。この形式主義を排して真の中世文芸史を考えるために中世和歌の限界と言うことを考えることは極めて重要な問題の一つである。

中世和歌史が自律的主体性を持っていると言うことは、中世和歌の中に独自の美的内容を持つということであり、中古和歌の時代的自動的延長の姿の中にあるということではない。中世和歌と言うものを単なる形式主義によって規定するのではなくその美的内容の独自性を考えることにおいて中世和歌は極めて多くの問題を内包している。中世和歌の本質内容は幽玄であるということは正しい。しかしこの幽玄だけで中世和歌の世界すべてを規定しようとする中世和歌即幽玄と言う考え方には問題がある。千載集の世界は幽玄であるとしているが、従来の文学史の説によればこれは中古和歌の世界であり、中世和歌とは考えないのである。そうすると中古の和歌の本質が典雅と幽玄ということになる。古今集を中心とする中古和歌の特質を典雅と幽玄であると規定することが果して妥当であろうか。千載集の特質は幽玄的であると言うことは通説として認められている。その千載集は中世的なるものの特質をよく示現しているものであり、中世和歌の最初を飾るものとして規定づけるところに和歌史の主体性が認められるのである。このように千載集にはじまる中世和歌には多くの問題が内包されており、和歌史上において最も豊かな抒情性が創造され、多彩な美的理念が認識されたのである。万葉集を中心とする上古和歌と古今集を中心とする中古和歌と千載集・新古今集・玉葉集を中心とする中世和歌には各々の特質がみられるのであり、万葉集から玉葉集までの和歌的展開の中に必然性が認められる。一般的には新古今集によって代表される中世和歌ということが認められているが、厳密に考えると中世和歌は新古今集だけによって代表されるものではない。しかしこの場合新古今集の中の歌の取扱い方にも問題がある。新古今集の中に西行や俊成の歌が多

く入っているから、千載集は新古今集の中に包含されて了うものであると言うことが出来るかどうかは問題である。そうなると新古今の世界の中に千載の世界が包含され、千載の世界は消失することになるので問題はそう単純に考えられない。しかし新古今集の世界には、歴史的なものと本質的なものとが綜合調和されており、そこに中世独自の余情的世界が形成されていることは明らかである。ここにおいて和歌における中世的なるものの範囲と言うことが解明しなければならない問題となって来る。和歌における中世的なるものは中世歌論の理念の中に実はみることが出来るのである。中世的抒情性の特質は「あはれ」によって示現することができる。上古和歌の世界が「まこと」であるとすれば、中古和歌の世界は「みやび」であり、中世和歌の世界は「あはれ」であると言うことができるであろう。三代集の世界というものは優麗典雅を中心とした「みやび」の世界であり、それが次第に中世的「あはれ」の世界へと展開して来たのである。この展開は八代集の内的展開として見られる。古今集から後拾遺集までは「みやび」を中心とした雅情と連想の世界であったが、金葉集になると源俊賴が現われ、中古的古今的なものから中世的なものへと展開して行ったのである。この金葉的世界の中には中世的「あはれ」の世界をある程度認めることができる。しかし金葉集を中世和歌に入れようとは思わない。それは中古和歌の中にあるが中世和歌への過渡的存在であったと言う方が正しい。この俊賴の歌は定家によって幽玄であると評されている位に中世的傾向がみられる。中世和歌の成立を告げる千載集の源流となったものは金葉集である。この意味で中世和歌にとって金葉集の存在は重要な意義が認められる。俊賴の歌としては先にあげた「うづらなく真野の入江のはま風に尾花波よる秋の夕ぐれ」の外に「風吹けば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの声」があり、その幽寂な境地と観照の深さを詠んだ点において中世的なものとして注目に値する。千載集の中にはさらに、「夏草のなかを露けみかきわけて刈る人なしに繁る野辺かな」や「河霧はみぎはをこめて立ちにけりいづく

なるらん千鳥鳴くなり」のような歌があり詠嘆と幽寂と観照の深さを十分認めることが出来る。と同時に流麗な「しらべ」と深い詠嘆の風情を感じるのである。この金葉集の世界は古今の雅情と千載的幽寂との中間にある展開相を示しているものである。これ等の美的様相は中世歌論の美的理念の中に認識することができる。従って和歌における中世的なるものを認識するためには中世歌論の美的理念を明らかにすることが必要である。

中世和歌の認識的基盤である中世歌論は幽玄と有心の歌論であるとも言われる。中世歌論は一般的に幽玄と有心への展開の中に認められると言われるが、この幽玄と有心の内容把握と言うことはそう簡単ではない。幽玄は千載集の世界を示現する美的理念であり、有心は新古今集の世界を現わす美的理念であると言われるが、中世歌論を幽玄と有心だけで規定づけて了うことにも問題がある。中世歌論の美的理念として「あはれ」「いう」「えん」「をかし」「たけ高し」「さび」「幽玄」「ほそみ」等をあげるとすれば幽玄と有心との関係の中で問題が存するであらう。幽玄を静寂縹渺の世界に認識すると正徹の妖艶美的幽玄が逸脱し、有心を「いう」「えん」「やさし」の世界に認識すると「あはれ」や「さび」「ほそみ」等が逸脱して了うことになる。中世の美的理念を幽玄と有心の中にすべてを規定づけることは困難である。中世和歌を千載集と新古今集だけであるとせよ更に玉葉集と草根集の世界も中世和歌の本質的世界を形成しているものであると見ると、為兼の世界と正徹の世界とが考えられなければならない。かくみるととき中世和歌の本質的世界というものは俊成と西行と定家と為兼と正徹との五人の歌人によって代表されると言うことも可能であり、かくみることにによって和歌における中世的なる範囲が規定づけられるのである。原則的に考えれば、中世歌論は余情の歌論であり、その余情がいかなる属性において把握されたかと言う点に中世歌論の本質がかかっているのである。これと同じように中世の和歌も余情の文芸であり、この余情が「あはれ」として現われたり「いう」「えん」として定着したり、幽玄となったり、「さび」として認

められたりしたもので中世の抒情文芸の特質はまことにこの余情的表現の中に明らかに見られるのである。

二

中世和歌は千載集と新古今集と玉葉集と草根集の四歌集によって代表される世界であると規定したが、これは考え方によっては色々問題があるであろう。四百年近くに亘って存する和歌の世界をいくつか規定づけることは容易なことではない。とくに中世和歌の上限と下限との問題で中古和歌と近世和歌との関係が生じる。また中世和歌を年代によって四期に分けることも可能であろう。それは元治期（俊成・西行）、元久期（定家・家隆）、正平期（為兼）、応永期（正徹）とすることも出来るであろう。また中世前期の和歌として見るとそこには四つの世界が考えられる。第一は俊成や西行の「あはれ」と幽玄の世界であり、第二は定家や家隆によって創造された優艶と有心の世界であり、第三は実朝によって表現された「長高き」世界であり、第四は式子内親王や俊成女などによる「あはれ」と優艶の世界である。中世和歌における女流歌人の世界ということは大きい美的世界を形成しているもので本講座においても四人の女流歌人の世界を取り上げているのである。中世和歌の本質的世界を説明する方法はいくつか考えられる。本講座は歌人研究を中心としているが、この歌人研究は歌という芸術的世界を創造したという意味での歌人の研究で、歌人の伝記を説述するためのものではない。従って歌人論はそのままと歌研究に通ずるものであって、和歌研究とはなれて歌人研究が存するのではない。だから和歌をはなれた歌人論などと言うことはあり得ないのである。その人の歌の世界を論究すること自身が歌人論となるのである。小説研究の場合に作品論か作家論かと言うことが問題となり、作品論ではなく作家論をやるというようにが多

く言われているがこの言葉位に荒唐無稽なことはないであろう。これこそ所謂ナンセンスであると言うべきであろう。作家を研究するということはその作家の生涯とか思想とか生活とかをみるのではなくその作家の創作した作品の世界を研究することである。作家の創作した文芸作品のみが文芸研究の対象となるのであって文芸作品をはなれて作家の日常生活とか思想とかその生涯とかまたは結婚生活の如きものをいかに詳細に研究したとしてもそれは文芸研究の対象とはなり得ない。従って文芸研究において作品論と作家論とを別なものとして考える根拠はない。作品研究に文芸研究の主体性があるのであって、作家の伝記研究や思想研究などは補助的なものである。従って歌人研究と言うことはその歌人の歌の研究のことであり、歌人の伝記や生活の考察はその歌の研究においては補助的又は前提的なもので主体的なものではない。その意味においても本講座に扱った歌人の研究はその歌の抒情性を究明することに中心を置いているが、しかし若干の例外も認められないでもない。

中世和歌における前期の世界は千載集と新古今集を中心とした世界であり、この前期の和歌の中にかなり重い比重がしめられているようである。この前期の和歌は千載集を中心とする和歌と新古今集を中心とする和歌とに分けられ、その美的内容もかなりの相違性が認められる。千載集は一般史の上では中古に属するものであり、和歌史の解説書の中には多く中古和歌に入れているのであるが千載集の美的内容より考えると中世的なるものに入れることが正しく、ここでは中世和歌の冒頭を飾る歌の世界として認めようとするものである。千載集の世界は金葉集と詞花集の世界にその基盤が考えられる。俊成や定家はともに三代の典雅を庶幾していた者であるが古今的なものとはならずして却って中世和歌の基盤をそれ自身の中に形成しているのである。古今集以来の連想と詠嘆とは金葉以下においては情趣述懐を一層重視するようになり、詞花集ではその詠嘆述懐が強くなり、中古末の無常末法思想によって悲しみはかなむことが抒情精神の中心であるかの如くなって来たのである。そして詞と

しても詞花集などには千載集と共通する悲情詠嘆述懷を現わすものが多くなつて來たのである。例えば「はかなし」「かなし」「さびし」「わぶ」「なげく」「あはれ」「思ひきや」「うらめしや」等の詞が多く用いられるようになり千載的詠嘆にも直結しているのである。また「いとど」「だに」「あな」など心情の鬱結停滯を意味する詞が千載集の世界では深化され縹渺幽遠なる幽玄の世界を形成したとも考えられる。千載集は和歌史の上で千載様式を形成していると言える。和歌史では万葉様式と古今様式と新古今様式の三様式を設定するのが通例であるが、その本質内容から考えるともう一つ千載様式を考えることが適切であるように思われる。それならこの千載様式の美的徵標は何んであるか。それについては色々な考え方が存するであろうが、究極的には幽玄と「あはれ」であると言うことが最も適切であろう。この千載様式の美的徵標は幽玄美であるとすれば、その幽玄美の美的内容が問題になる。俊成は歌合判詞を中心とした歌論の世界において幽玄という詞の外に「いう」「えん」「あはれ」「さび」「やさし」「たけ高し」「心細し」「をかし」等の美的理念を示現する言葉を多く用いているのである。これ等の美的理念は俊成の美意識の中ではいかに受容されているか。幽玄との關係はどうであるかと言うことが問題となるであろう。実はこの千載集の中に中世和歌の特質が認められるのであり、幽玄と「あはれ」と「さび」「いう」「えん」と言う美的世界をみることが出来る。千載集の世界は俊成と西行とによって代表される美的様相である。千載様式の特質は幽玄美だけですべてを規定してしまうと言うことは困難であるが、しかし幽玄美は千載集を代表する美的世界であることは否定できない。幽玄と言うものは縹渺としてかすかにひそやかな美的世界であつて、その中に「あはれ」と「いう」「えん」を内包していることは十分認められる。俊成的なる美と西行的なる美の本質が何にあったかと言うことは簡単に断定できないが、後鳥羽院が「釈阿はやさしくえんに心もふかくあはれなる所もありき」と俊成を評されているように俊成の本質的世界には「あはれ」と「やさし」と

「えん」の世界が綜合されていたことは認められる処であろう。俊成における「あはれ」と幽玄とがどのように相違しているかと言う問題はそう簡単に解明し得ないであろう。また全体的に考えると、中世和歌の本質的世界は「あはれ」と「えん」によって根本的に規定されるということも出来るようであり、そして「あはれ」に重点が置かれるとき幽玄となり、「えん」に重点が置かれるとき有心となり、中世和歌はかくして幽玄より有心への展開という様相の中に認められるとも言える。俊成も西行もともに哀感の漂う世界を詠んでおり、自然の静けさやかすかさに対して人間的な寂しさや哀感のしみじみと感ずる世界を俊成はとくに「あはれ」とも「えん」とも言っているようである。要は俊成の美意識の中で幽玄と「あはれ」が同じような内容で考えられている場合があり、また幽玄と「えん」とが同じく用いられていることもあって、これ等の美的理念の相違性を明確にすることは困難である。俊成に「えんにも幽玄にも聞ゆる」と言うことを述べ、「えん」と幽玄と類似性を示していることも注目すべきことであろう。全体として言えば、しみじみとした情趣の感じられる世界が幽玄美の素地であったのである。そしてこのようなしみじみとした情趣の感じられる世界を俊成は何んとなく「えん」にも「あはれ」にもまた幽玄なる世界と言っているものであって、全体が縹渺茫微たる世界の中にこれ等の綜合美を意識していた。それは綜合美であるとともに美の質においては純粹の單一美となり、綜合と單一とは相互に関連し合って表現形成の道を辿っているものである。俊成の幽玄美が單一美であるか綜合美であるかと言うことは色々と問題の存する処である。形式論理から考えればそれは綜合美ではなく幽玄は幽玄という美を意識していたのであると言える。何故なら俊成は幽玄という言葉をはっきり用いており、この幽玄とは別に「あはれ」「いう」「えん」「さび」「やさし」「たけ高し」「心細し」「をかし」というような美的理念を示現する言葉を用いて歌の美的世界を意味づけているのであるから、当然「あはれ」と幽玄とは異なるものであり、幽玄と「えん」とは別の世界であるべ